2026年 高山開治郎翁生誕150年

奇跡の風景、咲き誇る

～未来へつなぐ「今」を見に行こう。～

「白石川堤一目千本桜」は残雪輝く蔵王連峰と白石川の清流を背景に広がる、全長8kmにわたる1,200本の桜並木です。樹齢100年を超える大樹が織りなす風景は、宮城・東北を代表する桜の名所として、訪れる多くの人々を魅了し続けています。

1

毎年大勢の観光客が訪れる、圧巻の桜並木。
いつ、誰が、なぜ植えたのか
お話しします。

教えてくれる人　大河原町観光大使 高山信行さん

2

一目千本桜は**奇跡の風景**なんです。
当たり前のように広がるこの風景が、
消えてしまうかもしれません。

教えてくれる人　大河原町樹木医 尾形政幸さん

3

桜のまちの将来をお話しましょう。
奇跡の風景に会いに来てくださいね。

教えてくれる人　大河原町長 齋 清志

未来にも 桜と笑顔の 彩りを

大河原町は令和8年9月30日に町制施行70周年を迎えます。

ロゴマークデザイン・キャッチフレーズ：大河原産業高等学校

70th gawara Anniversary

1 愛郷の想い

―白石川堤 一目千本桜に込められた物語

「一目千本桜」として親しまれているこの絶景は、大正時代に一人の男が描いた大きな夢から始まりました。その人の名は、高山開治郎（たかやま かいじろう）。彼がどのような人生を歩み、「一目千本桜」がどのようにして生まれたか、そのお話をしましょう。

開治郎の志は、代々、孫の信行さんへと継承されています。水産業大手「株式会社北辰水産」の代表取締役社長を務める信行さんは、令和7年に大河原町初の観光大使に就任。一目千本桜の歴史と町の魅力を広く発信しています。

教えてくれる人
大河原町観光大使
高山信行さん

第一章　ふるさとを離れて

明治9年（1876年）、大河原の老舗旅館の長男として生まれた高山開治郎は、15歳の時に大きな転機を迎えます。父の死、そして家業の廃業。若き開治郎は、住み慣れた家を離れ、1人東京へと働きに出ることとなりました。

慣れない土地での厳しい下働きの日々。彼を支えたのは、まぶたの裏に浮かぶふるさとの景色でした。残雪に輝く蔵王の連峰、そして清らかな白石川の流れ。「いつか必ず、胸を張ってふるさとへ帰る」その強い決意を胸に、開治郎は寝る間を惜しんで働き、学び、やがて実業家として大きな成功を収めます。

当時、大河原に帰るのは蒸気機関車を乗り継いで2日の長旅だった。

第二章　形に残る「恩返し」を

成功を収めた後も、開治郎の心は常に大河原にありました。当時、東北地方はたびたび冷害や水害に見舞われていました。ニュースで耳にする故郷の苦境に、彼は「自分にできることはないか」と自問自答を繰り返します。

そんな折、白石川堤の改修工事が完成したという知らせが届きます。

「一時の金品ではなく、人々の心に残り、長く喜んでもらえるものを贈りたい」そう考えた彼が思い描いたのは、東京の自宅近くで人々を笑顔にしていた、美しい桜並木の姿でした。

年表で見る一目千本桜

1923年（大正12年）
高山開治郎氏が約700本の桜の苗木を大河原町に寄付・植樹

植樹間もない桜。後ろの山は韮神山。（1931年／昭和6年）

1927年（昭和2年）
同氏が約500本を町に寄付・植樹。
この頃から地元の学生がテングス病枝の剪定作業を開始。

1970年（昭和45年）
長年の保護活動が認められ、柴田農林高等学校が「日本さくらの会」より表彰を受ける

1990年（平成2年）
さくら名所百選（日本さくらの会）に選定

2001年（平成13年）
桜まつり会場～韮神堰間を往復運航する屋形船が登場

※屋形船は現在、運航していません。

2002年（平成14年）
遊歩百選（読売新聞）に選定

2023年（令和5年）
一目千本桜植樹100周年

第三章　1200本の苗木に託した夢

大正12年、47歳になった開治郎は、東京から植木職人を伴って帰郷します。用意した700本の苗木を、地元の人々や学生たちと共に一本一本、丁寧に白石川の堤防へと植えていきました。さらに数年後には500本を追加し、その総数は1200本にも及びました。

彼が投じた費用は、当時の金額で4000円あまり。現在でいえば2000万円に相当するほどの大金でした。それは、若くして故郷から離れた少年が、長い年月をかけて築き上げた努力の証そのものでした。

一目千本桜のそばを走ってきた蒸気機関車。（1961年／昭和36年）

第四章　そして未来へ

昭和17年、開治郎は66歳でその生涯をとじました。しかし、彼が植えた若木は、戦後の混乱期や貧しい時代にあっても、毎年変わらず花を咲かせ、人々に復興への希望と笑顔を与え続けました。

通常、ソメイヨシノの寿命は60年から70年ほどと言われます。しかし、開治郎の志を継いだ地域の人々の手厚い保護により、植樹から100年を過ぎた今も、この桜たちは見事な花を咲かせています。

現在、全長約8キロメートルにわたって続くこの桜並木は「一目千本桜」として全国に知られ、東北を代表する景勝地となりました。川沿いに立つ「桜樹碑」は、今も静かに、満開の桜と行き交う人々の笑顔を見守っています。

1933年に建てられた桜樹碑には「愛郷奉仕ノ念止ミ難ク　桜樹一千余本時価四千円ヲ 本町ニ寄付栽植ス」の碑文が刻まれ、故郷を思う高山開治郎氏の思いと栄誉を讃えています。

大河原町出身の実業家。大河原の名旅館「高山屋」の長男として生まれましたが、15歳のとき父親が死亡し、旅館が廃業。家族を養うために上京しました。苦難の末、東京商機新聞、東京美術館、日本林業という会社を設立し成功した開治郎は、愛郷の想いから、大河原町に約1200本のソメイヨシノを寄付。現在まで続く一目千本桜の礎を築きました。

高山 開治郎
（1876-1942）

高山開治郎翁の物語をもっと詳しくご覧になりたい方は、コチラ

一目千本桜とまちのひとのかかわり

一目千本桜は、春の絶景を届けてくれるだけではありません。いま大河原町では、桜を保全する、桜をPRする、桜を使った観光資源を作るなど、未来へつながる温かい取り組みが広がっています。

桜の息吹を染める
うらにわあとりえ

一目千本桜の剪定した枝を使って染めた美しい商品や「にゃんこけし」など、可愛いお土産が充実した体験型工房。桜の思い出を形に残しながら、心温まるひとときを過ごせます。

桜を歌い讃える
SYOUGAKUTAI

大河原で出会った4人の絆から生まれた音楽ユニット「SYOUGAKUTAI」。一目千本桜の歴史と人々の想いを歌い継ぐオリジナルソングは、CDでも好評発売中です。

桜を支える
大河原産業高校

昭和2年から柴田農林高校が守り抜いてきた保護活動。その伝統は大河原産業高校へと受け継がれ、今も生徒たちの手で施肥や剪定といった活動が続いています。

桜に願いをこめて
大河原町さくらの会

大河原町さくらの会では、みんなの記念植樹を行っています。結婚の記念に、赤ちゃんが生まれた記念に…願いを込めた桜が成長し、町のあちこちを美しく彩っています。

桜に親しむ
まちのひとびと

町の人々は日々の暮らしのなかで、一目千本桜に親しんでいます。春の花や新緑、夏の木陰、秋の紅葉、冬の葉を落とした樹形の美しさ、四季を通じて寄り添う町の誇りです。

桜を芳醇に味わう
大河原町観光物産協会

町産の大豆と米、一目千本桜から抽出した酵母で仕込む「おおがわら味噌」。桜の香りを芳醇に味わえる唯一無二の逸品として、年2回の限定販売で人気を博しています。

お問い合わせ
大河原町 商工観光課
〒989-1295 宮城県柴田郡大河原町字新南19（大河原町役場）
TEL:0224-53-2659　FAX:0224-53-3818

2 桜を継ぐ人

教えてくれる人
大河原町樹木医 尾形政幸さん

この町のあたりまえの風景は、実は「奇跡の風景」なんです

「この風景は、実は植物学的に見て『奇跡』と言えるものなんです」非常に太い幹や、黒っぽくひび割れやゴツゴツとした質感の樹皮からもうかがいしれます。通常、ソメイヨシノの寿命は60年ほど。しかし、ここの桜の多くは樹齢100年を超える大長寿です。長く生き長らえてこれた理由は、絶好の立地と管理にあります。桜は日光と酸素を好む『陽樹』です。白石川沿いは水はけが良く、川の流れが地中に新鮮な空気を送り込む、桜にとって理想的な環境なんです。

さらに重要なのが植樹から30年頃までの成長期の管理。100年以上もの間、地域の人々が慈しみ、適切な手入れを絶やさなかったこと。この深い愛情こそが、奇跡の絶景を支える真の原動力なのです。

立ちはだかる現代のルール

一目千本桜は大きな転換期にあります。植樹当時の桜は約300本（大河原町ではそのうちの200本）まで減り、老齢化による病気や枝枯れ、落枝の危険が深刻化しています。

苗木を植えた時代とは異なり、現代では堤防を守るための厳しいルール（河川法）が定められています。樹木の根が堤防を傷つけたり、倒木が水の流れを阻害したりする恐れがあるため、現在は白石川沿いへの新たな植樹が認められていません。つまり、今ある老木が、一本、また一本と姿を消していっても、その場所に新しい苗木を植えることができないのです。このままでは、桜のトンネルに、いつか大きな隙間が生まれてしまいます。

100年後の答えを探して

「叱られた時も卒業の時も、この桜の前で家族写真を撮ってきた」。そんな女性との出会いがありました。一目千本桜は単なる名所ではなく、町の人々の記憶が宿る舞台です。100年後の姿に明確な答えはありませんが、未来へ繋ぐ試みは始まっています。まずは今の美しさを五感で楽しむこと。この瞬間の感動を大切に受け取ることが、桜を未来へ繋ぐ一番の原動力になると信じています。

一目千本桜の「今」ドローン映像はコチラ↓

桜がつなぐ、新たな賑わいの場所づくり

一目千本桜上流部の桜はまだまだ若木ですが、ここには「おおがわら千本桜スポーツパーク」が整備され、サイクリング・ウォーキングロード、マウンテンバイクコース、パークゴルフ場、ドッグラン等が楽しめます。

令和10年度には、カフェや遊具広場、デイキャンプ場、アーバンスポーツ広場等を備える「賑わい交流拠点施設」が新たにオープンし、多世代が交流し憩いと観光を両立した拠点が生まれます。将来の桜の名所にもなることでしょう。

高山開治郎翁をはじめとする先人たちが、ふるさと大河原町へ寄せた深い慈しみの心。私たちはその想いを受け継ぎ、先年先までも繋いでいきます。桜と人々の笑顔が未来に続いていく大河原町を目指して。

奇跡の風景を、一日でも長く、健やかに

桜が1年でも長生きしてくれるよう、町では樹木医の指導のもと、土壌改良や剪定などの「桜樹保護事業」を推進しています。老齢化した桜の枝を支柱で支え、枝折れや倒木による事故を防ぐなど、保護と育成に努めています。

1ヶ月半満開を楽しめる見本園

大河原町では、桜の保全と並行し、開花時期の異なる多様な品種を植栽することで、約1ヶ月半にわたり桜を楽しめる「見本園」の整備を進めています。現在は、樹木医の指導のもと、多種多様な品種の桜を育て、町内での開花時期を調査しています。

3 千本桜を、千年先へ

教えてくれる人　大河原町長 齋 清志